

49 【やぶからぼう】

懐爺の居る祠の奥は鬱蒼（うっそう）たる竹藪でありました。

あるとき、完ちゃんが、

「あのたけやぶ、おもしろそうじゃ」

と何気なくいいました。

「おもしろそうじゃのう」

ぼくも相槌（あいづち）を打ちました。

以前から興味はあったのです。

あの竹藪に何もいないとしたなら、どこにも何もいない。

そんな風におもわせる竹藪だったのです。

それで二人して懐爺のところに行きました。

懐爺は丁度出かけるところでした。

「どこいくんじゃ」

ぼくは非難口調でいいました。

せっかく来たのに、どこに行くのだろう。

どこにも行くところはないはずなのに。

「裏の竹藪に行くんですよ」

懐爺は奥の竹藪の方向を指さしました。

「なら、つごういいのう」

ぼくと完ちゃんは、顔を見合わせました。

「金ちゃんも完ちゃんも、今日は駄目です」

懐爺は胸の前で両手を交差しました。

そんなことで引きさがる、ふたりではありません。

「いっしょがいいのう」

「いっしょしかないのう」

「それがいいのう」

「それしかないのう」

なんていい合って、ついていく素振りをみせました。

「それならわたしも行きません。竹藪に行くのは明日にします」

「なら、あすもくるかのう」

「あしたもくるぞい」

「あしたでいいのう」

「いちにちくらい、がまんじゃ」

なんてまたいい合って、懐爺を困らせました。

「竹藪で草むしりとか落ち葉ひろいとかごみ掃除とか、そういうことをやるだけですよ」

懐爺の口調は、何となく弁解口調でした。

「あやしいのう」

「いまごろくさむしりを、なんでするんじゃ」

「それが、なぜじゃのう」

「それが、もんだいじゃ」

またいい合いました。

懐爺はついに、痺（しび）れを切らしました。

「掃除しないと【やぶからぼう】がでるんです」

「なんじゃそれ」

完ちゃんがききました。

「【やぶからぼう】というおぼけは、藪の傍を通りかかった人に、棒で突くんです」

「【やぶからぼう】はおぼけかのう。たとえ、じゃねえんか」

ぼくはきいてみました。

「【やぶからぼう】は、喩えがそのままおぼけになったんです。棒のおぼけは、ほかに、【でくのぼう】、【おこりんぼう】、【きかんぼう】、【とうじんぼう】、【ひたちぼう】、【つかえぼう】とかがおります」

懐爺は明確に解答しました。

「やっぱしあのたけやぶ、おもしろそうじゃ」

完ちゃんは舌なめずりしました。

懐爺は完ちゃんの、涎（よだれ）をふいてあげながら、

「棒で突かれて、半身不随（はんしんふずい）になった人もいますよ。危険ですから近寄らないほうが賢明です」

諭す口振りでした。

「ならば、わしらも、ぼうをもっていくかのう」

ぼくが提案すると、完ちゃんは、

「あした、でっかいぼうを、よういするぞい」

と胸を張ったのです。

「呆れました。さようなら」

と懐爺は行って、祠の奥に消えてしまいました。

翌朝、完ちゃんとぼくはそれぞれ、長くて太い棒を担いで竹藪に向かいました。

祠は避けました。

懐爺に反対されるのはわかっていたから、別の道を使いました。

竹藪が、みえました。

いいや、竹藪が、ない。

完ちゃんとぼくは、顔を見合わせました。

そこにあるのは、清廉（せいれん）な竹林でした。

雑草も落ち葉もごみも、ぜんぶ取り去られた、うつくしい竹林でした。